

光岡寺報

2010年5月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地 384
後藤明照、由美子(惟蓮)
T&F 0790-26-0162
メール kouenji_dayo
@nifty.com
<http://kouenji-hou.com/>
通信費年間1000円

浄土とは存在の故郷である

安田 理深



デモクラティック・フィールド のらねこ

仏教徒宣言(その七十七)

風薫る五月・一年の内でも過ごしやすい時季なのに、どうも今年は、汗ばむような夏日があつたり又、肌寒かつたりと、温度差が激しく不安定な日々が続いています。田植えも苗の成長が思わしくなく例年より遅れているようです。が、地球の長い歴史のサイクルの中では、そういう事が起こっている。そんな一年でしかないのかも知れませんが。経験の浅い私たち人間は、その浅い経験を振りかざして、「様々な現象」を自分たちの経験の中に収めようと、不安がつたり、安心したりとあがいているように思われてなりません。私もその一人として、今をそれなりに理解し納得しようとして生きています。

しかし、私たちに送られて来る色んな情報は、送り手の操作が多分に施されています。そのことを、十重に意識しながら見・聞きすることが大切なのでしょう。今の日本社会の行き詰まっている様々な問題の解決方法も、マスコミの報道以外に、糸口が潜んでいるのかも知れません。

例えば、「原子力発電」の事と「地球温暖化」の事がワンセットのように言われ初め、温暖化対策と称し、原子力を利用し、それに乗って経済効果を期待する「原子力産業」を推進する方向性を持っているのが今の政府であり、日本の産業界・経済界です。その企業をスポンサーにして成りたっているのがテレビやラジオ・新聞社・・・等のマスコミです。だから、政府・企業・マスコミは不離一体のものであり、三位一体の体制なのです。そこから発信される情報は当然、片寄り、一方的にならざるを得ないし、批判的な事に対しては敏感に反応し、不利な情報は隠蔽するしかないのです。

最近では、地球温暖化とCO₂の関係に疑問が投げかけられて

いたり、温暖化に対して報告書を出している国連の I P P C (気候変動に関する政府間パネル) の科学者の中にも意見を異にし、脱退した人もあるようだが、このような事は報道されません。こんな状況の中で十四年五月ぶりに、高速増殖炉「もんじゅ」の運転が再会されました。これはこの国が「原発」を推進していくのだと言う明確な意思表示です。

運転再開後、警報機が鳴ったり、運転員の操作ミスが有ったりとトラブル続きです。この様に一週間ほどの間にこんなトラブルが起こっているのに、動かし続ける理由はどこにあるのでしょうか？原発の問題は放射能の問題です。それは「被曝」という「いのちを蝕む」事に繋がり、同時に巨額のお金が絡んできます。「お金」も「いのちと人のこころ」を奪い争いを起こします。そんな私たちに仏教は、「諸法実相 如実知見」と言う言葉に依って物事の本質も見定めることを説きます。「諸法」とは私の前に表れている「すべての現象」のことで、「実相」は「真実のすがた」ということです。それは諸々の存在のあるがままの真実の姿かたちを言い、そして「如実知見」とはあるがままに正しく見・知る事です。

私たちは、こういう言葉を聞くとすぐに自分に当てはめて、すべてのものをあるがままに正しく見ようと努力しようとしてます。それが私の常の在り方です。しかし、自分はどこまで行っても「虚仮不実」です。それは真実ではないということなのです。真実でない自分が真実なのです。しかし、そんな自分が「汝、真実たれ」という如来の呼びかけに呼応する時、自分の周りに起こっている全ての出来事が真実たらんとする私に、問いかけるのです。「それは、本当か？」と。

南無阿弥陀仏

釋 明照

仏事ひとくちメモ 葬儀壇(そうぎだん)

真宗会館冊子より

自宅で通夜・葬儀を営む場合、納棺が終わりますと、すぐに式場の準備にかかります。派手な装飾品などは取り除き、衣類など必要なものは取り出しやすいところに用意しておきます。

着替えや休憩のできる住職の控え室も必要です(控え室がなければ、式場に控え席を用意します)。自宅以外の会場(寺院や会館など)で営む場合は、会場側とよく相談して式場作りを行ってください。

つぎに、斎壇(壇飾り)についてお話します。斎壇の荘厳(お飾りのこと)は、今日、ほとんど葬儀社が行ってくれます。しかし、浄土真宗にそぐわないお飾りも見受けまますので、心したいものです。

浄土真宗の通夜・葬儀は、ご本尊を中心に行います。ですから、ご本尊は、参列する誰もが拜することのできる中央上部に安置し、その手前にお棺を置きます。早いうちに任職に相談し、ご本尊をお迎えしましょう。

昨今、通夜、葬儀にお参りしますと、斎壇の壇数を多くしたり、種々の飾りつけをするなど、豪華さばかりが目につくようになってきました。

古来、葬儀は、野辺の送りといって、自宅から葬列をくんで葬場に向かい、そこで、お勤めするために野卓(のじょく)に三具足(みつぐそく)(花瓶(かひん)・香炉・燭台(しよくだい))を用意してお飾りしました。その野卓が、現在では屋内に設ける葬儀壇の基本になるわけです。

ですから、浄土真宗の通夜・葬儀では、本来、壇飾りの必要はありませんし、華美に飾ることもありません。ご遺族の心情として、立派な斎壇にしてあげたいという気持ちはよくわかりますが、それにとらわれてしまおうと、何のために通夜・葬儀を行うのか、その大切なことが見失われてしまします。

また、最近では、写真飾ることが一般的になってきました。写真の陰になつて、ご本尊を拜することができない場合もあります。礼拝すべきは、写真ではなくご本尊です。本来は必要ないものですが、写真を置く場合には中心からずらすなどの工夫が必要でしょう。



葬儀壇の基本